

## 図 書 紹 介

### 海外技術協力事業団：東南アジアのデルター 東南アジアデルタ地域開発計画報告書。昭和38 年。151ページ。謄写版

東南アジアのデルタは、地理学の立場からだけでなく、総合的研究なり、あるいは進んで経済開発なりの立場から、きわめて興味ある問題である。東南アジアの3大デルタ、すなわち、メコン・メナム・イラワジのデルタについては、比較研究は、あらゆる意味で重要である。このデルタの比較研究はいままでのところ、わが国だけでなく、国際的に見ても、あまり行なわれていなかった。ところが、昭和37年から38年にかけて、デルタ地域開発の基礎調査として、海外技術協力団が農林省農地局調査官出口勝美氏を団長とし、農林省農業技術研究所永井臯太郎、建設省国土地理院大矢雅彦両技官を団員とする調査団を送った。その報告書がここに紹介するものである。

本調査団は、台湾の濁水溪、タイのチャオプラヤー（いわゆるメナム）、ビルマのイラワジ、インド・東パキスタンのガンジスの4デルタを踏査し、これに濃美平野を比較のために加え、デルタの自然的特徴（とくに地形と洪水型）、デルタの土地利用と水利用（灌漑と排水）、デルタの農業と農村、デルタにおける現行の開発事業と計画、さらに今後の開発にたいする所見とに分けて踏査結果を報告した。

僅か70日あまりでこの広大な4デルタをカバーしたのは、たいへんな努力だったと思う。とくにデルタの自然基礎と水利用については、専門家だけあって、よく観察されており、きわめて興味深い。もっとも、多分に印象記録的な程度にとどまらざるをえないところもある。もちろん、数日でたとえばイラワジデルタを観察してしまうことは、とてもできない。しかし、それにしても、わたくしの知るかぎりでは、デルタの比較研究として、はじめてまとまったものであり、その意味で評価されてしかるべきだと思う。また、本書は謄写印刷で関係者に配布されるにすぎないから、一部のものにしか知られないうらみがある。ここにとくに本報告書を取りあげたのは、こうした種類の文献がなるべく広く紹介される必要があると思うからであ

る。

わたくしは、デルタの自然的基礎の研究として本調査にきわめて有意義であると思う。というのは、これから本格的に手をつけられるべき研究の first step であるとの意味からである。しかし、その農業状態の報告や今後の開発にかんする所見は、あまりにも印象的すぎる。常識論の域を脱しないようである。なお、早急に報告書が出された関係もあるだろうが、縮尺ののっていない地図があったり、参考文献として同一書が重複して出ていたりして、かなりずさんである。

それにしても、東南アジアの文献として、最近官庁なり団体なりから刊行されている資料類にも十分注意をはらう必要がある。その1冊としても本書は注目されてよいと思われる。（本岡武）

### 伊藤博一：トンゲー・ロードービルマ賠償工 事の五年間。岩波書店、岩波新書 497。昭和38 年。vii+203ページ。

ビルマへ旅行して、ビルマへの賠償工事第1号としてのバルーチャン発電のことを聞かないものはないだろう。また、東南アジアへの旅行者で各地における日本工営株式会社の土木建設の話を耳にしないものはないだろう。わたくしは残念ながら、いままでのところ、日本工営の建設現場に入ったことはない。しかし、ビエンチャンを訪れたとき、メコン河上流の一支流でダム建設の調査を行なっている若い土木技術者から直接に話をきいたことがある。そのとき「東南アジアの開発に寄与する」と口でいうはやさしいが、いざそれを実行に移すことは、いかにたいへんであるかということ、しみじみと思いらされたのであった。

こんど岩波新書の1冊として、本書の広告を見て、さっそくこれを求め、むさぼるようにして一気に読んでしまった。読後の興奮さめないうちに、本書を紹介しておきたいと思う。

本書はもちろん学術研究書ではない。しかし、東南アジアの研究のために教えるところはきわめて大きい。なぜなら、著書は5年にわたって身をもってビルマの経済開発の現場にうちこんだのだから。バルーチ

ン発電工事のため、トンゲーから発電所までの間に送電線を建設しなければならない。その送電線の建設のためにトンゲーからロイコーに至る間の道路を建設する。これが、トンゲー・ロードであり、著者はそのため昭和29年の末から5年間この建設に没頭する。insurgents の出沒するカレン州の山岳地帯 200km にわたっての道路建設の consultant engineer としての体験は実にたいへんなものだ。この経験が淡々として、語られている。文章はよく、しかも多数の地図や写真がいっそう読みやすくさせている。まことに興味ある読みものである。

東南アジアにおける土木技術者の仕事がいかにたいへんであるかは、本書でよくうかがえるであろう。それとともに、それがなぜたいへんなのか、その言外の意味がいろいろと考えさせられる。とくに、developing countries における経済計画のありかた、またそこにおける指導者や住民の behavior にいろいろと問題があろう。これだけ苦勞して建設したバルーチャン発電所の第1期工事 8.4万kw がビルマ経済発展にはたす役割こそ、とくに知りたいと思う。おそらく、わたくしだけでなく、本書を読みおわったあと誰しもが希望するのではなからうか。とりわけビルマが“The Burmese Way to Socialism”を進んでいる今日、いっそうこの建設工事の現実的成果が知りたいものである。(本岡武)

**Enke, Stephen: Economics for Development. Prentice-Hall, Inc., Engelwood Cliffs, N.J. 1963. pp. xxii+611.**

東南アジアの経済開発問題をとりあつかうためには、経済開発理論をかためておかねばならない。

経済開発理論の文献としては戦後20年近くの間、数多くの出版を見るに至り、経済学において、ひとつの分野を確立するに至っている。

しかし、新刊のデューク大学教授エンケによる本書は、とくに注目をひく。第1にそれは近代経済学の成果を、グラフ、モデルおよびタムをとおして、きわめてわかりやすく、経済開発理論にとりいれている。しかも本書が All the Peasant Cultivators of Asia, Africa, and the Americas, Who Remain the Forgotten Men and Women of Economic Development にデディケートされているように、著者の

多年にわたる現地研究と、そのときに体験した低開発国の農民にたいする愛情とでつらぬかれている。まさしく理論と実践とのたくまざる組み合わせが、ここに見られる。しかも第2に、経済開発にかんする主要問題をもれなくカバーしている。すなわち、第1編の低開発の特徴からはじまり、第2編に開発のための innovation の意味、その innovation を実現するために、第3編では資本の蓄積と投下、第4編では労働の投下、さらに第5編は開発と貿易および援助との関係、最後に第6編として展望をとりあつかう。末尾の文献もよくできている。わたくしは、本書は経済開発にかんする入門書あるいは概説書として非常によくできていると思う。とりわけ、農業問題を強くとりあげていることは、低開発国の現状からして当然であろうが、興味深く思われる。そのなかで、低開発国における経済開発の方向として一挙に工業化を促進するか、それとも農業から固めてゆくかとの問題はエンケ教授の深い関心の問題である。これについては付録Aとして、Review of Economics and Statistics の1962年2月で発表した論文に手を加えた「農業生産性向上をとおしての工業化」が再掲載されている。おそらく、経済開発を具体的に考える場合の根本的問題のひとつであろう。その農業生産性向上についても、農業革新は community development なくしてあり得ないとの主張もまことに同感である。

もっとも、本書は、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ等の全世界の低開発国をとりあつかっているために、東南アジアの実情にマッチしない議論も多い。また東南アジアといっても国々によって経済開発の現実やこれからのありかたはまちまちである。この多様性を考えながら本書を読むとき、いかに経済開発が現実の問題として困難であるかを思わせる。いずれにせよ、わたくしは本書は経済開発にかんしてぜひとも一読おすすめた好著であると思う。(本岡武)

**Johnson, John J. (ed.): The Role of the Military in Underdeveloped Countries. Princeton University Press, Princeton, New Jersey. 1962. pp. viii+423**

比較政治学の分野で、新興諸国と軍部との必然的結びつきが語られるようになってから久しい。しかし、従来はその主題に関するケース・ワークがなされず、も

っぱら純理論的考察のみがなされる傾向が顕著であった。その点新興諸国の軍部の実態を探るケース・スタディの堆積の端緒を切るべき一書が、このたび、The RAND Corporation の努力で公けにされたことは、なにはともあれ実に有意義なことであったと思う。

12篇からなる論文集である本書は、新興地域全般を扱っているが、そのうち3篇が東南アジアに関係している。とりあえず、その3篇それぞれの個性を捉えておこう。内容はいずれも立派で甲乙はつけ難い。

まず、G. Pauker がインドネシア軍部を担当して、インドネシア政界で重きをなす軍部をば、多面的な視角から解剖している。46頁にわたる叙述の、最後の10頁余りが、実に面白い。現在の軍部が内に多大な問題性を孕んでいること、その理由などが、明快に描かれているからだ。またその個所は、神秘の人ナスチオンの心中の思惑を測定してもおり、同時に、共産党の軍部観にまで筆は及んでいて、インドネシア政治の将来の展望に益するところが多い。Pauker の本稿執筆の真の趣旨を探るのも一興だろう。というのは、かれは、主体性を欠き没意慾的なインドネシア軍部を素材として、軍部をば新興国家の守護神と見做す通説に、痛烈な逆説をぶっつけている感じだからだ。

次いで、L. Pye がビルマ軍部論を展開している。かれは、民族主義政治家と植民政府以来の行政官との相剋が、機動的な政治権力の確立を妨げ、そのことがひいては軍部擡頭の土台になった、という、かれの従来からの持論を展開している。その限りでは、かれの説得力は太したものだ。しかし、軍部それ自体の社会的性格等の分析が欠けているため、将来の展望を行う段になると、議論がにわかに甘くなる。

最後に、タイの軍部を、D. Wilson が論じている。一次資料が駆使され、いかにもかれらしい構想に感じて書かれている。タイの軍部史は、研究の余地をまだ多分に残しているわけだが、本稿でも、歴史的叙述の個所より、現在の軍部を、その内部構造・政治理念・政治的行動様式等を捉えることによって、内面的に理解しようとする試みのなされている個所のほうが、ずっと冴えている。Wilson は、結論として、タイの軍部が、政治的正当性の裏打ちを欠くことを、かなり明確に示し出している。しかし、かりにそうだとすると、その正当性喪失の責任の所在をどこに追跡し、求めたらいいかのか、また、軍部以外に正当性を備えた有力な

政治勢力が一体全体存在しているのか、Wilson は、本稿では、まったく答えてくれない。

以上の3篇は、このようにいずれも独自の個性をもっているが、みな一読の価値は充分ある。それらを収めた本書は、類書が皆無であるだけに、是非とも、この地域の政治に関心をもつものの座右に備えられてしかるべきであろう。

なお本書の冒頭に、E. Shils それに L. Pye が、新興地域の軍部について、一般理論的見解を展開しているが、とりわけ Pye のは有益である。Shils のも、かれの最新の近代化理論として、見逃せない (Shils は、本書で、新しく military modernizing oligarchy という概念を提案している)。(矢野暢)

**Butwell, Richard: Southeast Asia, Today-  
And Tomorrow, A Political Analysis.  
Frederick A. Praeger, New York. 1961. pp.  
x + 182**

本書は、ビルマの専門家 Butwell が、東南アジア全体の政治を、かれなりに整理し、脈略づけた、東南アジア政治概説書である。一見平易で、入門書の体裁を呈しているが、出門の書ともいえるだけの味のある本である。最近刊行されたこの種の本に、Victor Purcell: The Revolution in Southeast Asia, 1962 があるが、東南アジアの現代政治の動態を内在論的に多角的に生き生き捉えている点では、Purcell のものより本書のほうが高く買える (Purcell の知識は、該博かつ正確だが、どちらかといえば歴史的な叙述にかたより、現代政治にたいする問題意識に立体的な深みがなく、また冷た過ぎるきらいがある)。

本書の構成を見ると、第一章、アジア的基盤と西欧の感化、第二章、最初の政府選択、第三章、肌合った政治制度の探索、この三章で、東南アジア諸国が過去辿ってきた試行錯誤の道程と将来辿る可能性のある道筋が、明快に描かれている。現在に至るまでの複雑な歴史的経緯が、各国別に、まったく要領よく、整理されている。第四章、政治過程、は短いわりに充実している。この地域の政治の動向を左右する要因の所在を知る上で、大いに参考になる。第五章、政府の施政、第六章、宿弊と政策変更、では、諸国の社会体制近代化の態様と、近代化を妨げる要因とが、多面的に追求されており、興味深い。第七章、共産主義の挑戦、

第八章. 外交政策, では, この地域をとりまく国際政治的環境がダイナミックに論じられている。

本書は, このように, 東南アジア政治の問題点をほぼ網羅している。叙述は平易明快だが, 含みの多い文章が並んでおり, 実質的密度は高い。読者には, 従って, 慎重な読み方が要求されよう。少くとも読者は, 将来の歴史に鋭い洞察を加えるべく著者が本書全体に働かせている一種の歴史的な読みの意識を感じとらねばならない(ちなみに著者は, 南ヴェトナムの将来については, 一. 軍部支配, 二. ゴ・ジン・ジュム政権の継続, 三. 一旦民主化したあと共産化, という三つの可能性を見ており, インドネシアの将来については, 陸軍の支配を暗示しているようだ)。

本書を貫く結論的主張は, すぐれたリーダーシップが必要だ, という平凡な主張のようだが, 著者の要求するのは, 政治指導が民主主義的であれということではなく, 「自国を共産主義もしくは解体から救い, 自国の地位を高めようような」政治指導の存続である。一見寛容なようだが, これは, 東南アジア政治の現実にとっては, かなり厳しい要求である感じだ。平凡な結論だが含蓄は大きく, いろいろ考えさせられる。

巻末の selected bibliography には, 最少限度の基本的文献が精選されており, 東南アジア政治に関する必読書を知る上で役に立とう。とにかく, 一般の入門書である。

なお, 本書には, 邦訳がある(鹿島守之助訳「東南アジアの今日明日」鹿島研究所出版会300円)。このようなすぐれた基本書が訳されたこと自体は喜ばしいが, 遺憾ながら, 日本訳は, ひどく拙劣で推薦できない。政治学用語の訳出や個有名詞の表記法もいい加減だが, なによりも, 誤訳が多過ぎる。第三章はとくにひどい。一, 二指摘すると, たとえば, “He publicly propitiates the nats (the spirits of Burmese animism)…” (p.51) をば, 「公然とビルマのナッツ(聖霊を信仰する行者)に近づき……」と訳したり, Nan-Chao を「南朝」と訳したりするようではいただけでない。また, 原著者の幼稚なミス(たとえばp.50の年号“1957”は, 明らかに“1956”のまちがいだ)は, 日本訳で当然訂正されてしかるべきであったが, 訂正されていない。

一般に, 東南アジア関係書の日本訳に, まともなものはないが, 本書の訳がその従来傾向を是正する

に至らなかったことは, いくえにも残念なことだ。

(矢野暢)

**Usha, Mahajani: The Role of Indian Minorities in Burma and Malaya. The Institute of Pacific Relations. 1960. pp.344**

東南アジア諸国では, 国民の大多数を構成する土着人の外に, かなりの数の外国人のいることは周知の通りである。就中華僑勢力が極めて強く, 東南アジア華僑に就ての研究もアメリカのスキナー (G.W. Skinner), 英国のフリードマン (M. Freedman) 等によって鋭意進められている。華僑に次いで力のあるのは印度人である。殊にビルマでは印度人の方が華僑を数的にも凌駕しているのである。しかるに東南アジアにおける印度人, いわゆる印僑の研究書はそれ程多くはない。その意味に於て少壮の女流印度人学者ウシャ・マハージャニ女史による, ビルマ及びマラヤに於ける印度人マイノリティの役割の研究が公刊されたことはまことに喜ばしいことである。

印度とビルマとは歴史的にも深い関係があるが, 1852までの印度人は極めて少数であった。印度人人口が急激に増加するのは1852からでイラワジ・デルタが東印度商会に併合せられてからである。その後逐年増加して1931には100万余であるという。印度人は各種の職業に従事する外に印度教徒, イスラム教徒, キリスト教徒, 仏教徒, シーク教徒があつて複雑である。しかしこの書物はそのような点には興味を示さず, ビルマ人口の大多数を構成するビルマ人ナショナリズムと印度人の関係を主として取扱っている。

マラヤにおける印度人人口は1957年の統計では70余万であるが, 比率の上から言うとビルマにおける印度人比率よりも高い。その3/5はゴム園労働者であるが, 都市住民もかなり多い。印度人の中でもタミール人, テルグ人など南印出身者が多く, 又その宗教的背景もさまざま, 華僑ほどの団結を示していない。ここでも著者は印度人社会の文化的側面にはそれ程の興味を示さず, ナショナリズムとの関係に関心の中心をおいている。

その意味で評者などには面白いことばかりは書いてない訳であるが, それは専門の相異によることであつて著者の関知しないことである。しかし戦後の政治事情を知るためにはもちろん, 民族研究上にも重要な参

考文献がある。引用文献も豊富であり、かつ現地において多数の人々と面接し、充実した記述ぶりである。

項目は(1)戦前のビルマにおける印度人社会の解剖、(2)ビルマ・ナショナリズムと印度人マイノリティ、(3)ビルマにおける印度人労働と移住、(4)マラヤにおける印度人社会の解剖、(5)日本のビルマ及びマラヤ占領、(6)戦後ビルマにおける印度人、(7)戦後マラヤにおける印度人問題、(8)戦後マラヤにおける少数民族ナショナリズムの三角関係などの諸章である。

著者は1933プーナに生れ、1952ラジプタナ大学でB.A., 1954マサチューセットのスミス大学でM.A. 1957ジョンスホプキンス大学でPh. D.を得た人でInternational Relationsを専門としている。

(棚瀬襄爾)

**Tein: Phei Myin 「a-sei-ga neiwun: the' te bama」 Rangoon. 1960. 3vols., pp. 1192**

現代ビルマ語の表現形式を調べるために、最近、数冊の新刊本に目を通したが、その中で最も印象に残ったのが、ここでとりあげるテインペーミンの「日出づるビルマ」である。この本は、雑誌「ミャワディー」に、四年間に亘って連載された長編小説を単行本として、まとめたものである。

主人公タキン・ティントゥンが、ラングーン大学の学生であった1938年から、この小説は書き始められている。この年は、ビルマにとって、誠に多難な年であった。第一の紛争は7月に発生し、その後各地に広がったインド人イスラム教徒とビルマ人仏教徒との間の宗教的対立であり、第二は、11月に勃発したイェナンジャウンの油田労働者のストと、それに呼応した農民のデモ、そして第三は、それらに続くラングーン大学生の反政府ストである。ストに参加した学生タキン・アウンジョーが、警官に撲殺された事から、ビルマの全産業がゼネストを敢行、遂に反政府運動から、反英独立運動にまで発展した。翌39年、バモー内閣は、全責任をとって辞職、ウー・プ内閣、ウー・ソー内閣、ポートウン内閣と次々に登場した新内閣も、ビルマ国民の排英独立運動の大波を、喰止める事は、もはや、不可能だった。1942年、日本軍は、アウンサン將軍を司令官とするビルマ独立軍と共に、タイから、ビルマへ進撃、6月、ビルマ全土が日本の軍政下に入った。

排英独立を念願としたビルマ国民は、日本軍を歓迎したが、その本質が帝国主義である事に気がつくると、真の独立を求めて、抗日運動を開始するようになった。主人公タキン・ティントゥンが、抗日ゲリラとして、地下活動に入るところで、この小説は終わっている。

全体を概観して感じる事は、この本が、著者の単なる創作ではなく、英国の植民地時代から第二次世界大戦に至るまでの、ビルマの政治的変動を、著者の体験を通して描いた、一種の型破りな「現代政治史」だという事である。現代ビルマ史に関する研究や、ウー・ヌ、ウー・パウ等政治家の自叙伝は、今迄にも、幾つか公表されているけれども、市民生活の一般的描写を通して、その背後を流れる歴史の動きを、これ程見事に、いきいきと描いた本は、恐らく、これが最初ではなかろうか？勿論、小説である以上、或る程度のフィクションは、止むを得ないが、主人公タキン・ティントゥンが、若き日の著者の化身である事は、ほぼ間違いないであろう。アウンサン將軍、ウー・ヌ、タキン・タントゥン、タキン・ソー、ネウィン將軍等、独立後の一流の政治家達の若き日の姿が、随所に見られるのも、本書を、一層興味深いものとしている。

原文の表現は、平易で、文章も、歯切れがよい。話し言葉を、ふんだんに用いた事も、この本を、一層身近かな感じのものとするのに成功している。尚、原題名は、「a-sei-ga neiwun: the' te bama」太陽が、東から昇るのは、自然の摂理であるように、ビルマに、独立の日が訪れるのもまた、当然であるというドーバーマー・アジアヨンの歌の一節からとったものである。(大野徹)

**Coedès, George: Les Peuples de la Péninsule Indochinoise, Histoire -Civilisations. Dunod, Paris. 1962. pp. 228.**

インドシナを構成する複雑な民族文化を、歴史的な流れの上で把握しようとしたものである。著者は言うまでもなく斯界の権威の一人で、現在極東学院の名誉院長である。Les états hindouisés d'Indochine et d'Indonésie (1948) や Une période critique dans l'Asie du Sud-Est, Le XIII<sup>e</sup> siècle (Bull. Soc. Etudes Indoch., 38, 1958) など著者自身の研究成果を更にその後の研究状況と照らしあわせて、改めて原

住民の起源から20世紀前後までのベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ビルマの歴史をまとめている。

本書は5部からなっている。第1部は、地理的環境と先史時代に於ける文化・民族移動・言語の親縁関係・社会状態などが概括的にとりあげられている。第2部は、インドシナ国家の形成と題して、紅河以南への中国の侵入、数世紀遅れてインド文化の流入によって、扶南、林邑(占城・環王)、暹、墮和羅国などの国々が拡張していく6世紀位迄の時期。第3部(6世紀から13世紀迄のインドシナ諸国)では、インドシナの三大文明——ベトナム文化、クメール文化、ビルマ文化の繁栄を描く。13世紀は、インド文化の衰退期で、東南アジア全体に《transvaluation de toutes les valeurs》が起り、インド文化はそれまで保護者であった支配者階級から分離して民衆の中に浸透していき、ヒンズー教や大乘仏教が支配者の宗教となっていくと著者は説明している。この衰退期に元の遠征があって、ますます衰退が進められ、元の征服は、単にクメール帝国、チャム王国、ビルマ王国の風化を手伝ったにすぎず、次には新しい王朝の時代が始まる。この13世紀の政治・文化の状況に第4部があてられている。第5部は13世紀以後の各国史であるが、西欧人接触以後は極めて簡単に述べられているのみで、量的にもこの部は全体の1/3を占めるにすぎない。

結論として、シナ化(ベトナム)とインド化(その他のインドシナ諸国)との基本的相違は、中国は征服により、インドは文化的浸透によって、各々の文化をインドシナに導入した点にあって、両者は量の差異でなく質の差であるという。

大変わかり易く書かれており、最近の文献もかなりあがっているので、インドシナ半島における文化の流れを知る上に手頃な書物といえる。(前田成文)

**Benda, Harry J. and McVey, Ruth T. (ed. and with an introduction by): The Communist Uprisings of 1926-1927 in Indonesia; Key Document (Translation Series, Modern Indonesia Project). Southeast Asia Program, Cornell University, Ithaca. 1960. pp. xxxi + 177**

20世紀初期から独立までのインドネシア民族主義運動史は、1926-7年を境に、二つの時期に分けて考えられる。第一期を民族主義運動の胎動期とするならば、第二期は、純正民族主義を主流とする統一行動確立の時期と特徴づけられる。この意味において、1926-7年は、インドネシア民族運動史上、重要な一時点を構成する。

今世紀初頭における新興インドネシア知識階級の啓蒙運動には、顕著なものがあつたが、それは、ともすれば、大衆より分離した運動であつた。知識階級の自覚は、大衆にまで伝達されねばならなかつた。この役割をイスラムの政治運動が演じている。経済界における華僑勢力や西欧人の抬頭に反対するイスラム中産層は、イスラム同盟(Sarékát Islam)を結成し(1910)、自民族による経済と教育の高揚運動を展開する。幅の広い運動目標に、大衆との絆を象徴するイスラムが結合することは、この運動組織を急速に膨張させ、1919年には、SIの会員数は250万人にまで達している。

しかし、ロシア革命の影響もあり、イスラム政治運動は左傾化する。この傾向に関して、SI左派は、イスラムの指導層と対立、1920年にインドネシア共産同盟を結成する。独立した左派は、当時、未だ大衆組織化の用具として重要な意味を持つイスラムと分離することによって、弱体化し、1926-7年の革命にも失敗して、全面的に後退する。他方、イスラムの政治運動も又、保守革新の主導権争いのために衰退する。このような情勢下において、スカルノを中心とする知識人により、完全独立を標榜する国民同盟が組織されたのは、1927年であつた。

本書は、1926-7年における共産革命の社会・政治上の背景を分析した蘭印政府の報告書の英訳である。この報告書は、オランダ政府が公表を好まなかつた秘密文書も含まれている。インドネシア共和国政府の許可を得て、コーネル大学の「現代インドネシア・プロジェクト」によって公開されたものである。報告書の内容は、蘭印総督の報告、バンタム報告、スマトラ西岸部報告の三つより構成され、それに本書には、インドネシア政治史家、H. BendaとR.T. McVeyの長文の序論が附加されている。この報告書は、単に近代インドネシア政治史の理解のためのみならず、当時の地方のイスラムの情勢や社会構造の理解にとって、極めて重要な資料を提供すると共に、共産革命における

当時のイスラム教徒の役割、共産党組織の内実、西ジャワやスマトラ西岸部の当時の社会・政治情勢など、幾つかの重要な問題への解答も含んでいる貴重な文書である。(口羽益生)

**Goethals, Peter R.: Aspects of Local Government in a Sumbawan Village (Eastern Indonesia). (Monograph Series, Modern Indonesia Project). Southeast Asia Program, Cornell University, Ithaca. 1961. pp. vii + 143**

コーネル大学の Modern Indonesia Project 並びに Southeast Asia Program の director であり、又近代インドネシア政治史研究の指導的地位にある G. McT. Kahin 教授は、かつて、現代インドネシア研究において、最も未開拓な分野の一つは、地方の社会、政治経済情勢の研究であると述べたことがある。本書は、コーネル大学 Modern Indonesia Project の monograph series の内で、地方の社会政治情勢を取扱った最初の報告である。

社会人類学者である著者 Goethals は、1954年より二年間、Sumbawa 島北端の農村 Rarak を中心に、集約的な現地調査を行ったが、本書は、その調査報告の一部であり、題名が示すように、分析の焦点は、社会政治情勢に置かれている。

インドネシアの歴史を振り返って見れば、容易に理解されることであるが、イスラムの浸透した地域では、オランダ植民地政府の分割統治や間接統治の政策とも絡んで、伝統的な adat (慣習) 首長とイスラムの指導者 kijaji (ulama) の勢力間の力関係が絶えず問題にされている。17世紀にイスラムが到来した Sumbawa でも同様である。Goethals は、Rarak の adat 勢力と hukum (イスラム法) 勢力間の力関係の社会的基盤の分析を試みている。

村落レベルの adat 勢力は、旧制村長 (kepala kampong) によって代表されるが、この村長の役割が地方自治体の公式的なものに限られ、漠然としたものであるため、彼の村民に対する直接的影響力は弱い。1951年の村落合併による村連合 (gabungan) の確立は、村長の地位を更に不安定なものにしている。kepala kampong の役職名も wakil kepala gabu-

ngan (助役) に変わっている。

hukum 勢力の代表者は、村の mosque の責任者である lebé であるが、lebé は、ジャワの penghulu に当る。lebé を長とする mosque 役員 (isi mesigét) には、その他に、rura, pengulu, mudom, ketib, marbat 等が居る。彼らは、婚姻、相続、死亡に関する手続きの指導監督、mosque での礼拝、その他の儀礼を通じて、村民と密接な連がりを持っている。注目されることは、彼らは又、呪医の (sanro) 役割をも演じていることである。1955年の総選挙では、政治的に、インドネシアは、主に四つの政党 (国民党、Masjumi 党、NU 党、共産党) に色分けされたのであるが、Rarak においては、hukum 勢力が Masjumi 党を支持して圧倒的に強い。adat 勢力は、イスラム保守の NU 党を、一部青年層は、国民党を支持している。Masjumi 党は、本来、知的、進歩的なイスラム革新派の政党と特色づけられているが、Goethals は、それが、Rarak においては、文盲率の最も高いイスラム保守派によって支持され、インドネシア地方政治の社会的基盤は必ずしも全国レベルと合致しない点を明確に指摘している。(口羽益生)

**Geertz, Hildred: The Javanese Family, A Study of Kinship and Socialization. The Free Press of Glencoe, N.Y. 1961. pp. xii + 172**

本書は、MIT 国際研究センターにおける Java project (1951-53) の成果の一部である。同プロジェクトでは、七人の社会学者並びに人類学者が、夫々、村落、市場、政治・階級構造、家族、華僑社会、言語のテーマを担当し、東ジャワ、スラバヤの南方、ブラントス河流域の人口約1万8千人の Modjokuto という仮名の町を中心に二年間の現地調査を行っている。この調査成果は、既に、調査員の学位論文として報告済みであるが、書物として最初に出版されたのは、前号の図書紹介欄にて紹介した C. Geertz の「ジャワの宗教」であり、Geertz 夫人の本書が、二番目のものである。同夫人は、ハーバード大学、加州大学、MIT などで、研究員又は instructor として活躍しておられたが、目下、主婦として「家庭づくり」に専念しておられるようだ。

副題が示すように、本書では、ジャワ人が、mature

“Djawah”として形成される過程に、分析の中心が置かれている。「家族は個人と彼が所属する文化のかけ橋である」というモチーフは、本書全体の底流となっている。

H. Geertz に依れば、親族を通じて見たジャワ社会の価値体系には、二つの焦点がある。第一は、「敬」(urmat 又は adji) の概念であり、それは、更に三つの意味に分化する。(1)畏 (wedi). (2)恥 (isin), (3) 慎み (sungkan) の三つである。第二は、社会的調和 (rukun) の概念であるが、ここで重要なことは、たとえ見せかけであっても、調和を保つように努める態度である。この二つは、ジャワ社会のあらゆる局面において、望ましい行為基準とされるもので、価値レベルにおけるジャワ社会の背景である。mature Djawah とは、これらの価値が内面化された人格を意味する。

このような人格は、ジャワ家族内において、どのように形成されるのか。この問を、Geertz は、あらゆる角度から分析する。親族の形態、機能の分析も、常に、この問と関連づけられている。

ジャワ家族の形態的特徴は、双系的核家族にあるが(村落では、65%)、同時に妻方に重点が置かれる matri-focal pattern の傾向が強い。特定の親族集団の型はなく、ego. を中心とする近住の親族が、生活の折目折目で共同する。このような分析の内注目し価値するものは、matri-focal pattern の傾向とジャワ社会構造の連関、又、婚姻、相続の慣習に関連するイスラム法の浸透度合の分析であろう。意外にイスラム法が軽視されている点が指摘されている。極度に高い離婚率の要因分析も興味深い。いずれも重要な問題であるが、ともすれば、現地資料の不備のために捕え所がなく、又長期の観察を要する上記諸問題に取り組んで、一応の成果を挙げた Geertz 夫人の努力に対し、筆者は、深く敬意を表する。(口羽益生)

**Ooi Jin-Bee : Land, People and Economy in Malaya. Longmans, London. 1963. pp. xx + 426**

本書は人文地理学者の手によるマラヤ地理の概説書である。もともと東南アジアの諸国のなかで、しっかりした地理学教室をもつ大学はシンガポール大学とマラヤ大学であり、また地理学的研究の最も進んでいる

のはマラヤである。しかし、これまで、まとまったマラヤ地理としては、Ginsburg, Roberts 教授共著の Malaya があったが、ここにイギリスの S.H. Beaver 教授監修の権威ある Geographies for Advanced Study の1冊として、きわめて詳細なマラヤ地誌が出版されたことは、地理学研究からだけでなく、東南アジア研究の立場から慶賀すべきことであろう。

著者 Ooi Jin-Bee 博士は中国系で、マラヤ生まれ、当時シンガポールにあったマラヤ大学をおえて、オックスフォード大学で研究し、現在シンガポール大学の地理学の Senior Lecturer である。このことは、東南アジアの地理も、いよいよ、外国人学者でなくて、現地人の学者でもって書かれるようになったことを示している。地理学研究上の注目すべき発展であろう。

マラヤ地理として、本書は3部からなる。第1部は「土地」であり、地質と地形・気候・植生・土壌をとりあつかう。第2部は「住民」であり、人口パターンの形成・人口分布のパターン・集落のパターンをとりあげる。第3部は「経済」であって、未開人の原始経済・農業経済・家畜飼養漁業林業・鉱業・工業・商業・運輸・問題と展望とにわけられている。

その本の題目どおり、land, people および economy にわたっての comprehensive な研究である。しかも、68図におよぶ地図と図表は、さすがに地理学者だけあって、きれいであり、また要領を得ている。48葉におよぶ写真、また64をかぞえる統計は、本文の理解を助けている。わたくしの知るかぎり、くりかえしているが、はじめてのマラヤ地理である。マラヤ研究のためには、ぜひとも目をとおさなければならないものである。

ただ、叙述の方法はあくまで従来の伝統的な地理学のそれによっている。いいかえると、きわめて常識的な見方が多い。というより、常識的な理解から一歩も離れていないという感じが強い。それだけに、なんでも書いてあるが、ともすれば重点的な考察がなく、無味乾燥な叙述が多い。しかも、教科書であることも目的とされたので、余分な叙述が見られる。たとえば、土壌とはなんかといった定義などあるのは、余分なことのように思われる。その反面、政治過程や経済成長についての分析がほとんどない。あるいはまた人文地理学的に見たマラヤの特質をとらえようともされていない。あまりにも、伝統的地理学だといわざるを得ない。

い。

批判はともあれ、マラヤ研究のための大きな業績であることに間違いがない。(本岡武)

**Gullick, J. M.: Malaya. Frederick A. Praeger Pub., N.Y.. 1963. pp. 256**

本書は Nations of the Modern World 叢書の一冊として出版されたものである。著者ガーリック氏は英国の人、Taunton School 及びケンブリジで教育を受け、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスのレイモンド・フェース及びモーリス・フリードマンなどマラヤに詳しい人類学者の指導も受けている。まず植民地官吏となり、次で今次大戦中軍籍に入ったが、1946 Malayan Civil Service に加って11年間マラヤにあり、マラヤ共産党対策、貿易、農村振興等々に従事した。1957-62 ロンドンでマラヤにゴムのエステイトを持つ人々の Guthrie Group の所長をつとめた。従って純粹の学究活動のみをしているのではないが、Journal of the Royal Asiatic Society 等にも幾篇かの論文を発表している。しかし何よりも注目すべきガーリック氏の論文は Indigeneous Political Systems of Western Malaya, 1958 であって、ロンドン大学経済学部の社会人類学叢書の (Monograph on Social Anthropology) 一冊として出版されている。西部マラヤの村落構造から支配階級、サルタン等に至るまで、その政治的社会的構造を明らかにしたもので、ガーリック氏の学的名声を決定したものと言うことができ、マラヤの社会構造の研究者にとって不可欠の文献と認められている。

マラヤは周知のようにマライ人、中国人、インド人からなる複数社会であり、殊に20世紀に入ってから人口的にも経済的にも著しい発展をとげた。その原因は主としてゴム栽培の導入、錫鉱の開発及び国際貿易港としてのシンガポールの機能によっている。こういう複数的な社会をかかえながら、戦後には独立を獲得し、更には北ボルネオ、サラワクを含めてマライシア聯邦へと発展し、経済的にも安定した国民として形成されて行く姿は東南アジアの国としては驚くべき現象であると言える。ガーリック氏は本書でこの過程に対して統一的な説明を与えようとしているのであって、氏が直接政治や経済にたずさわっていた人であるだけにその説くところにあおなげがない。

本書の半ばを占めるのはマラヤの歴史であって、

1400から1511までのマラッカ王国の歴史にはじまって、現代に及び、これに11章をついやしている。以後の諸章は政治、経済、農村振興、教育、新指導者などを取扱っているが、新聞記事、各種のリポート類がよく利用されている。

本号に紹介されているシンガポール大学の Ooi Jin-Bee の著書がより多く地理的であるに対して、本書はより歴史的、文化的であるが、共にマラヤの現状を理解するために不可欠の文献と思われる。但し1958の「西部マラヤの土着政治組織」の方が学問的香気に於ては遙かに高いように思われる。(棚瀬襄爾)

**Newell, William H.: Treacherous River, A Study of Rural Chinese in North Malaya. Univ. of Malaya Press. 1962. pp. xxv + 233**

Treacherous River とはマラヤの Province Wellesley の中央部にある川で現在 Sungei Pertama として知られている。本書はその川に沿う潮僑コミュニティの調査報告である。しかし単なるモノグラフではなく、彼らの出身地である広東省の北東部における中国村落やマラヤの他の華僑社会(とくにシンガポールの都市住民や広東人のコミュニティ)との比較を行なって、この報告をより価値あらしめるものとしている。内容は、家族構造、宗教、結社、共同労働、紛争等、極めて社会学的な問題に重点が置かれている。

(1) 調査地が潮僑のコミュニティであること。これは、村人の(少くとも古い世代の)関心が常に中国に向っていることを意味し、又、マラヤにおける華僑一般の農村生活の典型とはなりえないことも示す(方言・出身地・環境・政府の干渉の度合・住民の伝統的価値への志向度などによって同じ中国人コミュニティでも種々のバラエティが生じる)。(2) 一方の方言が他方に通じないということはあっても、中国人社会の一部であるという意識は強い。隣接のマレー人との社会的経済的な接触は殆んどなく、生活様式・宗教などもマレー人から影響を受けることは殆んどない。

(3) 中国に於けると同程度の強固な同族結合や、(経済的単位としての)世帯と村とが密接に結びつくというようなことが予想されるが、実際には、この基本的な結合関係が欠如している(この村の潮僑は、専ら野菜作りを主とし、養豚・養鶏をもして生活している。労働

には四季の別がなく、四季のはっきりとした水田地帯のような共同労働の組織は必要がない。

(4)この新しい生活環境に対応して、同族・村結合の代わりに、「感情」(友達であること、友情)を契機とするインフォーマルな集団が形成されてくる。(5)更に伝統的価値体系を本土から持ってきた世代と、次のマラヤに生れ育った世代のものが交代しつつある。この交代を知る規準として、(a)世帯が核家族より大きくないこと、(b)父子間の葛藤が増して両者別々の核家族を作ることの二つが上げられる。(6)結局、彼らは「外見上は中国の伝統的な価値(体系)を保持しているように見えながら、実際は新しい型の社会を作っている」のである。

著者 Newell はイギリス流の社会人類学者で、このモノグラフは1954-5年の約10カ月間の参与調査によるものである。(1948年には四川省の成都付近の村をも調査している。)マラヤの華僑農民の社会構造を取り扱ったのは彼が最初であろう。彼自身本書を preliminary survey としているので今後更に研究を進めるのであろうが、欲をいえば全体社会的なパースペクティブをとり入れてほしかった。(前田成文)

**Insor, D.: Thailand, A Political, Social and Economic Analysis. George Allen & Unwin Ltd., London. 1963. pp. 188**

ドン・ムアン飛行場の説明から叙述が始まる点やあまり聞き慣れない著者の名前などからして、一見本書は、好事家のものした、いい加減な本のような印象を与えかねないが、しかし、実は、一般の本ではないまでも、それほどふざけた本ではない。

著者のタイへの関心は、広汎に及び政治経済の基本的特徴から、はては、大学教授の給料にまで及んでいる。しかし、本書の眼目は、サリットの施政のなかに、タイの将来の政治経済の動向を決める要因を求めるところにあるようだ。

タイ国の政治については、70頁余りが割かれている。タイ政治を常識的に人物中心の政治と考え、30年代から今に至る著名政治家の解説がなされているが、タイ政治の有機的な構造把握が平板で、ひどく食い足りない。ただ、われわれの知ることの少ない58年以降のタイ政治の実態に、かなり筆が及んでいて、少くともその個所は新鮮な思ひで読むことができる。経済に

関しては32頁が割かれているが、サリットの経済開発六カ年計画が焦点となっており、興味深く読める。サリット政権がタイ経済近代化の阻害要因をどう捉えているかを示す Kurit Punakan の11ヶ条 (pp. 156~7) など面白いデータだ。全体としてサリットの政策に好意的で、将来に期待を抱かせる書きかたをしている。

全般的に、著者のタイにたいする評価は、厳しいようで甘い。官僚層の腐敗の原因を「低い給料と遅い昇進」に求めている点など、同情的な判断だ。そして、将来の政治のあり方を国際政治の動向と結びつけて考えている点なども、リアルな判断だが、タイの政治家にたいしてかなりスポイリングな考え方だ。しかし、評価といえるものがあるだけかもしれません。著者の評価の拠り所は、各章に点在する「アジア民主主義の諸問題」などの一般論めいた議論にあるらしい。しかし、そこに示される基本的問題意識が、余りに常識的でとってつけた感じなのは気になる。また、その問題意識が、著者の思考過程で、タイの現実にごう照射されたのかも不明瞭である。そういった点では、著者がアカデミックでないことが災いしている感じだ。しかし、その反面、アカデミックな処理を受けていないため、かえって、本書が、新鮮な魅力を備えるようになったふしもある。沢山のデータが、充分加工されぬまま盛り込まれたからだ。もっとも、そのデータは、もっぱら英文の二次資料から採られている。その点、本書は、絶対的魅力を欠く。ただ、タイの政治経済の最近の動向がかなりよく描かれている点で、本書は、ほかに知的好奇心を満たすよすがをもたぬ読者の欲求不満をば、かなりの度合、みたしてくれることだろう。その点を買うことにしたいと思う。(矢野暢)

**Pendleton, Robert L.: Thailand. Duell, Sloan and Pearce, New York. 1962. pp. xvi + 321.**

著書 Pendleton は 1917~35 の間にインド、フィリピン、シナでそれぞれ長期間、熱帯の土壌および農業の研究、指導にあたった後、タイ国にすみつき、1957年に死去するまでほとんどその全部をタイ国での研究、指導に過したという。本書は Pendleton の熱帯におけるこのような豊富な経験と数多くの研究業績を中心として R.C. Kingsbury その他の人々が補足、

編集したもので、つぎの10章から成っている。

1. History, 2. Physiography and Geology, 3. Soils, Natural Vegetation, and Animal life, 4. Climate and Water Economy 5. The Agrarian Landscape: Irrigation, Rice Agriculture, and Farm Systems 6. The Agrarian Landscape: Subsidiary Crops, Animal Husbandry, and Fishing 7. The Utilization of Forests 8. Mineral Deposits and Their Development 9. Power, Industrial, Potential, and Manufacturing 10. Transportation, Communications, and Trade

このうち、2, 3, 4, 7の各章は Pendleton 自身の報告を中心として書かれているが、6, 9, 10の各章は主に本書を編集した Kingsbury によって書かれている。

農林業およびその基礎としての自然条件の広い分野を含み、内容も豊富であるから、タイ国の農林業を知ろうとする者にとってはその概要を各方面から理解す

るのに適切で、すぐれた著書ということができ、是非一読して戴きたいと思う。

概要を理解するには適切であるとしても、一面深い専門的な知識を求めるものには些か物足りないうらみはある。各章とも解説的な記述であって、基礎になったデータに極めて乏しい。たとえばタイ国全土にわたって土壤図がつけられている。その業績は高く評価すべきであるが、それは土性による分類に基づいてつくられそれぞれの農業的な価値にまでふれてはいるが、分析結果の記載はなく、その他の土壤学的な分析、説明はみられない。しかし、このようなことはもともと本書の目的ではなかったのであろう。深化した専門的な研究はむしろ今後の問題で、巾広くこの国の農林業の現状とその自然的な立地条件をおおづかみにも把握することがまず第一に必要である。このような全般的な理解のもとに、専門的な研究の問題点は各人が本書から間接に読みとるべきであろう。

(堤利夫)